

---

# 吸血鬼をひろいました。

依月朱慧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

吸血鬼をひろいました。

### 【Nコード】

N3017Z

### 【作者名】

依月朱彗

### 【あらすじ】

今朝、拾っちゃいました。

犬でも猫でもなく

吸血鬼。

普通の短大生、辻谷ひなたと

迷子吸血鬼、エリユトロン・クリーオス・デュシス・カタポティオン。

この吸血鬼、なんか変！！

吸血鬼をひろいました。

何の変哲もない日常。

変わり映えのしないいつもの風景。

の、はずだった。

長い黒髪をくるくると器用に結び上げ、財布をバッグにしまう。

その日、辻谷<sup>つじたに</sup>ひなたは買い物に行くためにドアを開けた。

彼女は一人暮らしで、今日は食材を買わなければ晩ご飯のおかずがない事に気が付いたからだ

これはゆゆしき事態だ。

本当に、買い物に行くつもりだった。

ドアを開けるまでは。

ドアを開け、一歩踏み出したところで何か足元に違和感を感じ、視線を下におろす。

「……………」

そのままひなたはドアを閉めた。

ドアに手をかけたまま自己暗示を開始する。

「…違う、見間違いよ、見間違い。そんなアパートの前に男の人が行き倒れてるとかしかも私の部屋

の目の前とかそういうのは絶対ありえない。うん、ありえない。」

そう自分に言い聞かせ、ひなたは再びドアを開けた。

再び視線を下におろす。

見間違いではない。

「……………」

再びドアを閉め、再度自己暗示を開始する。

「違う、落ち着け、落ち着くよ私、そう、そうよ。疲れてるの。疲れてるのよ…！」

意を決し、再度、ドアを開ける。

本日3回目になるその行動を繰り返す。

やっぱり、居る。

「い、いやあっ！やっぱり居るっ！」

「…ん。」

ひなたのその言葉に答えるように男がゆっくりと目を開ける。ぼんやりとひなたを見つめるその瞳は白に近い灰色。

着ている服も黒を基調とした服で短くはねた髪の毛も黒。

ただ一つ、その灰色の瞳だけが異様に目立っていた。

日本人じゃないのかな？いや、でもカラコンとかあるし…

うーんうーんと一人で考え込むひなたの思考を止めたのはぐううう。という音だった。

もちろん音の主は目の前の男だ。

「お腹…空いてるの…？」

「…うん。」

視線を外さずに彼は答える。本当に空腹のようで今にもまた昏倒してしまいそうだ。

ひなたはしばらく考え込んだ。

一人暮らしの自分の部屋に男を連れ込む…。いや、掃除はしてあるから綺麗なんだけど…。

男を見るとなんとも情けない目でこちらを見ていた。例えるなら捨てられた子犬のような目。

悩んだ末、ひなたは男の腕をつかんでいた。

「こつち。家の中入って。」

「うん…。」

あまりにも空腹すぎて言葉を発することすら億劫そうに見えた。

なんとか彼を支えて家に入れる。ちなみに何かあった時の為にドア

は半開きだ。

彼を座卓の前に座らせるとすぐさまひなたは冷蔵庫を開けた。何かないだろうか。と探してみるが今から買い物に行くつもりだった為、冷蔵庫にはほとんど何も入っていない。

唯一入っていた卵二個をフライパンで焼いて彼に出してやる

「ご、ごめんね。今から買い物に行くつもりだったからこれしかなく…。」

「…ありがとうございます。」

へらっ。と力なく笑ってから彼はひなたの作った卵焼きを食べる。

完食し、彼がごちそうさま。と言い終わった後にとても申し訳なさそうな顔をしているのに気が付いた。

しかし、あえて見ないふりをして彼が食べ終わった皿を片付けようと彼に背を向けた。

と、彼がふいに口を開いた。

「ごめん…えっと…」

「大丈夫。今から買い物に行くところだったから。」

「う、うん。それもそうなんだけどさ…」

「え？」

彼の方を向くとやはり申し訳なさそうな顔をしている。

次の瞬間、彼はとんでもない言葉を口にした。

「せっかく作ってくれたのにごめん。味はすっごくおいしかった。でも…俺たちが食うのはこ

ういう“人間の食べ物”じゃないんだ…。」

「へ？」

ひなたは思わず自分の耳を疑った。

聞き間違いでなければ彼は“人間の食べ物”といったはずだ。

それはすなわち。

「人間じゃ…ない…の？」

その問いに彼はためらいがちに頷いた。

その反応にひなたは顔を引きつらせつつ聞いてみる

「う、嘘よね？じよ、冗談言ってるんだよね？だってめっちゃくちゃ普通の人間…」

ふるふる。と彼は首を振る。

怯えたひなたが彼から距離を取ると、彼は少し寂しそうな顔をした。

そうして、ふらふらと立ち上がりドアの方を指すとする。

「どこ…行くの…？」

「わかんない。」

「分からないって…家とかは…？」

「ん…帰り方、分かんないし。」

ひなたの問いかけに困ったような笑みを見せながら答える。

そして少し考え、うんうん。と頷く。

「知り合い…とかは？」

「こつちには…居ないけど。」

「居ないって…。じゃあ…どうするの…？」

「わかんない。…でも怖いだろ？俺のこと。」

だから。と頼りない足取りで玄関までたどり着き、ドアに手をかけた。

と、突然ひなたが彼の服の袖を引っ張った。

ひなたはさして力を入れたつもりではなかったのだが、彼はそのままその場に崩れ落ちた。

「え、な、なに…？」

「…なに…食べるの…？」

「え…」

「あなた達。何を食べるの…？」

「血。」

「ち…?」

いたってシンプルな彼の答えに思わずひなたは聞き返してしまった。  
人肉とか答えられなくてよかった。と安心しつつ考える。

血を食べる。血を食べるイキモノと言えば。ひなたの脳裏にある言葉が浮かぶ。

「…吸血鬼…?」

この問いに彼は素直に頷いた。

ひなたは一瞬考えてガサゴソと何かを探し始める。

ようやく探し出したのは小さな十字架のネックレスだった。

「……ど、どう…?」

「え…?よく似合ってるよ、思うけど…?可愛いね。」

「あ、ありがとう…って!そ、そういう事言ってるんじゃないかって!!」

なんとも普通の感想が返ってきた。普通に照れかけて何かがおかしい事に気づく。

一応見せているのは十字架のネックレスのはずなのだが。

十字架が苦手で、か弱い乙女が偶然十字架のネックレスなんか持ってる。

襲おうとした吸血鬼がぎゃああ!などと断末魔の叫びを上げつつ嫌がる。

というのはホラー映画の鉄板だ。

不思議そうな顔をして首をひねる彼に、ひなたの顔も若干青ざめる。

「きつ、吸血鬼って十字架ダメなんじゃないのっ!?!?」

「たぶんそれ…迷信。」

「う、嘘っ!じゃ、じゃあニンニクとか太陽とかはっ!?!?」

「うん…あんまり好きじゃないけど全部大丈夫。」

ニンニクって食った後の匂いきついし、夏の太陽って結構眩しいんだよね!。



などと呑気に言いながら一人うんうん。と頷いている。

「う…嘘お…」

その場にへたり込むひなた。どうやら彼が元気になったら。という想定で試しているらしかった。

自分の思いつく限りで今できる吸血鬼の対処法がまったく無意味だとは。

そんなひなたを彼は困ったような表情で見つめる。

「…俺、もう行った方がいい？」

「ど…どれくらい…飲むの…？」

「え？」

「だ、だから、血！や、やっぱりたくさん飲む…の…？」

「いや、食う…飲むときは飲むけどそこまで飲まなくても生きていける。」

人間も食うときは同じようなもんだって聞いた事がある。と言いつつ彼はひなたの方を見ている。

身の危険を感じたのかひなたは若干後ずさりしつつ聞いてみる。

「…襲ったり…しない…？」

「しない。」

表情一つ変えずに即答。

その言葉にひなたは再び考え込む。このまま放っておけば彼は確実に飢え死にするだろう。し

かし、もしその言葉が偽りだとしたら。

じっ。と彼の目を見つめてみる。襲ったりしない。そんな彼の目を見て、ひなたは決断した。

立ち上がり、台所から包丁を持ち出す。

「な、何!？」

今度は彼が後ずさった。もしかや包丁で刺されるのではないかと。

元気な時ならいざ知らず、こんな体力が無い時にそんなことをされてはたまらない。

しかし、彼の考えは杞憂に終わった。

彼の傍に座ると震える手で包丁を持ち、ひなたは一思いに自分の指に傷をつけた。

赤い鮮血が指を伝う。今度は痛みで震える指を彼に差し出したす。

「…の…飲んでもいいから…」

「え…」

「そっ…そのかわり！飲んだ後襲ってこないでね！！」

「わ、分かったって。」

そう答えると、彼はひなたの手に優しく触れ、その傷口をゆっくりと口に含んだ。

伏し目がちに彼女の血をこくり…こくり…と飲んでいく。

その姿はさつきまで弱っていた彼とは違う妖艶さを漂わせている。

それだけでも当惑してしまうというのに、彼の舌が自分の傷口を舐めているのを指先から感じ

、ひなたはさらに顔を赤くして俯いた。

「…ごちそうさま。」

静かに、呟くように、彼は言った。

そうして、顔を上げた彼と目が合う。恥ずかしさから思わずひなたは視線を外してしまった。

「ありがとな。うまかった！助かったよ。」

さっきの声とは対照的な、明るい声で彼は言う。

ちらり、と彼の方を向くと彼は自分のポケットからハンカチを取り出し、先ほどまで口をつけ

ていたひなたの指をぬぐっていく。

一通りぬぐったところで彼は身軽そうに立ち上がった。

「じゃあ、俺行くから。本当、ありがとな！」

につ、と人懐っこそうな笑みで彼は笑う。

尖った牙のような歯が覗いて彼が吸血鬼である可能性を感じさせる。

そのまま、彼はドアを開けて出て行ってしまった。

ぱたり。とドアが閉まっても、ひなたはしばらくその場に座り込んでいた。

本当に、彼は襲ってこなかった。それどころかひなたの指をぬぐい、礼まで言っただけで普通に出て行った。改めて考えてみると元気になって襲ってくるくらいなら最初から襲って来ていたはずだ。

そこでひなたはある違和感に気が付いた。

自分は確かに左手の人差し指を思い切り包丁で切ったはずなのに、改めて見ると傷口が無くなっている。

傍を見ると確かに血の付いた包丁が転がっている。

こんなことをしたとすればそれは彼以外に考えられなかった。

「本当に…吸血鬼だったんだ…」

そうして、彼のことを思う。

家に帰る方法も、行き場所も分からない。おそらくこのまま一人でこの街を彷徨うのだろう。

わたしには…関係ない…よね。

俯いて、左手を見つめる。彼が血を飲んだ形跡はもう残っていない。

去っていく前の、彼の笑みが浮かぶ。

本当に、そのまま放っておいていいのだろうか。

ぐっとこぶしを握り締め、ひなたは立ち上がった。

外に出て、左右を見てみると彼はきよろきよろとあたりを見回しながら、何か考えているのか

時々立ち止まりながら歩いていた。

ひなたが考え込んでいる間にずいぶん家から離れた所に行ってしまうている。

ひなたはその後ろ姿を追いかけた。

「待って！」

ひなたがそう叫ぶと彼が振り向く。

近づいてみると不思議そうな顔をしてひなたの方を見ているのが分かった。

「俺、何か忘れ物したっけ？」

「ち、ちが、う。」

彼に追い付こうと全力疾走したひなたはうまく喋れない。

ひなたは彼が離れていかないように彼の服の袖を右手でつまんだ。

彼はひなたの行動が分からずにまだ不思議そうな顔で彼女を見ている。

やっと少し話せるようになったひなたはゆっくりと話し始めた

「い、行くところ、無いんだよね？」

「うん。ない。」

「じゃ…じゃあ…」

その先の言葉を言うのをひなたはためらっていた。

俯き、何度も何度も深呼吸をする。

やっと決意したのか、ひなたは彼を見つめた。彼も、ひなたを見つめ、首を傾げる。

「うちに…来る…？」

「え？」

「だっ、だからっ、家に帰れるまで、うちに…」

「いいの…？」

自分でも、ばかげたことを言っていると思っていた。

さっきであったばかりの、しかも人間ですらない男を、家に住まわせる。

二人きりで、生活する。

彼に問われ、一瞬決意が揺らぐ。

しかし。

「このまま行っても行くとこも帰り方も分からないんだっいたらまたどこかで倒れるんじゃないの…？」

今の生活よりはきつと寂しくない。

「なら…うちにおいでよ…。」

「本当にいいの？」

「い、いいよ…。」

ひなたのその言葉に、彼は一瞬驚き、そして満面の笑みを見せた。

「ありがとう！あ、えーっと…。」

礼を言った後で彼は悩みながらひなたの方を見つめる。

しばらく考えて、ひなたに問う。

「名前、何だっけ。」

もしかしたら聞いていたのに忘れているのかもしれないと思い、考えたのだろう。

その表情は少し申し訳なさそうだ。

「辻谷…ひなた。」

「ひなたかあ。可愛い名前だな。」

「あ、え、う、うん。ありがとう…。え、えっと。あ、あなたは？」

「俺？俺の名前は、エリュトロン・クリーオス・デュシス・カタポティオン。」

「……へ？」

名前ではない。この長さは違う。というか何なのかというかなんかの呪文ではなかるうか。い

やむしろふざけているのではないだろうか。

そう思いつつ、ひなたはもう一度訊ねてみる。

「えっと…な、名前…。」

「だから。エリュトロン・クリーオス・デュシス・カタポティオンだっけ」

「え、えりゅ…？…だめ、長くて覚えられない…」

「…じゃあ…エリュでいいよ…。」

あきらめたように、彼 エリュは答えた。

かくして、一人の女性と一人の吸血鬼の奇妙な同棲生活が始まった。

吸血鬼は紳士です。(前書き)

十字架もニンニクも太陽の光も大丈夫！そんな吸血鬼アリ！？

## 吸血鬼は紳士です。

吸血鬼 エリユと暮らし始めて早一週間。ひなたは彼の居る生活に慣れつつあった。

彼がひなたの家に住むにあたって彼女と約束したことがいくつある。

その一、ひなた以外の人間の血は吸わないこと。

その二、寝ている時に絶対何もしないこと。

その三、というかその前に襲ってこない事。

その四、着替えは絶対のぞかない事。

その五、部屋の中のを勝手に漁らないこと。

とりあえずその5箇条に加えて彼が自発的に約束したのが

ひなたが居ない時に不用意にドアを開けない事と客が来ても見つか  
らないようにすること。

エリユ曰く、さすがに一人暮らしの女の子の部屋に彼氏でもない男  
が居たら不審じゃない？とのこと。

一週間生活してみて分かったことがいくつかあった。

十字架もニンニクも太陽の光も平気なのだが、どうも彼は正座と箸  
を使うのが苦手らしい。

彼は吸血鬼だが人間の食べ物の味も分かる。

なのでひなたと一緒に食べることにしたのだが…。

ひなたと座卓に座り、食事をしている時、彼も正座をしようと試み  
ているようだが、

ものの数分で情けない顔をして足を崩す。

それと同時になんとか箸を使って食事をしようとするものの、彼は

吸血鬼。

血を吸う習慣はあるが、固形の食べ物を食べる習慣などまったくない。

もう一つ、彼は猫舌であることも判明した。

やはり熱いものを食べる習慣はないので一生懸命冷まして食べる。

その姿が何とも可愛い

そして彼は普通の男性よりも優しいということも分かってきた。

一度買いい物に連れて行ったとき、ひなたの荷物を全部持ってくれたのだ。

おかげでひなたは持って行ったバッグ以外ほぼ手ぶらで帰ることができた。

彼曰く。

自分たちは人間よりも頑丈で力も強いから、役に立てることがあれば役に立ちなさいと教わった。らしい。

とても素敵な教えでそれを教えた人物もそうなのだが、

それを実行しているあたり、彼が素直で優しい人物なのだという事がわかる。

他にも、ひなたの授業の都合上昼飯抜きになってもたまに情けなく声をあげるだけで文句も言わず待っていたり、“食事”をした後に「ごめん」と「ありがとう」を忘れなかつたり等々。ひなたのイメージしていた吸血鬼像を普通にぶち壊すような言動の数々にただただ驚いていた。

「ねえ、エリユって本当に吸血鬼…?」

「え?そうだけど?何で?」

ひなたが食事中にそんなことを言ってしまうくらい不思議なものだった。

だいがここでの生活に慣れてきたのかエリユはのんびりと答える。



ひなたはうーん。と考え込む。解せぬ。

「なんかこう…なんか…もっところ…のべつまくなし人襲って血吸うのかと思ってた」

「違うよ！んなことしねえって！」

その言葉をエリユは全力で否定した。

確かに、エリユがそんな吸血鬼ならば今頃ひなたは生きていないだろう。

「それは一部の奴らだけで実際はそんな無差別に人襲うようなマネしねえって！」

さすがに気分を害したのかむうう。とひなたを見るエリユ。

それでもきつく睨んだりすることはなく、彼女を怖がらせまいをしているのが分かった。

「ご、ごめん。そうなんだ…。」

その言葉にうんうん。と力強くうなづくエリユ。

と、そんな時だった。

ひなたの部屋の呼び鈴が鳴った。

念のため、エリユはクローゼットに素早く隠れる。

「はい。」

そう返事をし、ひなたはのぞき窓から訪問者を確認。

そこにいたのはひなたの幼馴染達だった。近くに住んでいて、こうしてときどき遊びに来る。

一人はショートカットではつらつとした印象を受ける女性。

もう一人はふわふわとした長い髪で性格も穏やかそうな女性だ。

かちゃり。とドアを開けると彼女たちは手土産を持ってきていた。

なんとなく、流れは分かる。

顔では笑いつつ、ひなたは後ろを気にしていた。

せっかく来てくれた彼女たちを無下に追いつ返すこともできずに、ひなたは彼女たちを家に入れた。

…見つかりませんように。

二人とも同じ想いだった。

が。唐突にシヨートカットの方の女性が口を開く。

「ねえ、なんかさあ、ひなた何か隠してない？」

「ふえっ！？」

「…っ！？」

見透かされたような発言に変な声をあげる。

隠れているエリュも、反射的に声を上げて動きそうになった。

一体なぜそんな発言に至ったのか。

「な、な、何で？」

引きつった笑みを浮かべつつひなたは返す。

ひなたは昔から嘘をつくのが苦手だ。

もう一人の柔らかな雰囲気的女性が続ける。

「うん、何かね。私たちが来たあたりからなんか様子がおかしいの。」

「なーんか上の空っていうか部屋気にしてるって言うか？普段はそんなことないのに？」

「座る位置もいつもは玄関側なのに今日はベッド側だし、後ろ気にしてるし」

ねー。と勝気そうな女性に同意を求めると彼女も力強く頷く。

「そ、そんなことないよ…？」

「アンタ嘘つくの下手だからね。」

「ううう…助けてよお優香あ…」

すかさず柔らかな雰囲気的女性 優香に助けをもとめるひなた。

「んー…薫ちゃん気になることは分かるまで問い詰めちゃうからね。」

ふふふ、と笑うだけでまったく助け舟を出す気配はなさそうだ。

一方、クローゼットに隠れているエリュは何とも申し訳ない気分になっただけ。

出来ることならなんとかここから抜け出して隠れたい。とも思ったのだが、残念ながら出口は一つしかない。

その間にも薫は徐々にひなたを追い詰めていく。  
とんつ。とエリユの隠れているクローゼットに追い詰められたひなた。思わず息を止めるエリユと。

くううう。

俺の…馬鹿…っ!!

この至近距離。自分でも聞こえた腹の音。確実にひなたと薫にも聞こえていたはずだ。

「…何の音？」

「え、あ、えと…」

「ねーねー、何の音？」

「うああ…」

「ひーなーたちちゃん？」

くううう。

追い打ちをかけるようにもう一度エリユの腹が鳴る。

こんな事なら先に飲んでおくんだった。と後悔するエリユ。

ちなみにひなたにも同じような考えが浮かんでいた。

「そこかな？」

「え、ちよつとダメっ！」

がちっ。と彼が隠れているクローゼットを開けられると。

「あつれ〜？何も無いや。」

クローゼットを開けるとそこにはひなたの服と丸まった毛布だけしかなかった。

つまんない。とでも言いたげな表情で薫はクローゼットを閉めようとした。

エリユとひなたが安心してため息をつこうとしたところで、薫は再びクローゼットを開け、目の前に転がっていた毛布を引っぺがした「って、こんなとこに毛布なんて丸まつてるわけないよねっ！」

「…っ」

いきなり視界が開けてエリユは顔をしかめる。

二人は別の意味でため息をついた。

「…ごめん、ひなた。」

「…お腹、空いてたんだね…。」

「…うん。」

改めてクローゼットから出てきたエリユはばつが悪そうに座卓の前に腰を下ろした

「はい、どうということなのか説明してもらおうかな？ひなたちゃん」

「うう…」

「これって同棲っていうのかなあ」

「ち、違っ…！」

「どう違うのよー。どう見たって同棲じゃない」

困ったひなたはエリユの方を向く。こちらも困ったような表情でひなたのほうを見ている。

お互いの考えていることはなんとなくわかる。どうしよう。

とりあえずひなたはここへ至るまでの経緯を素直に話してみた。

「吸血鬼イ!？」

薫はがばりとエリユの方を向く。優香も不思議そうな表情でエリユを見る。

二人の視線を受け。やや間があり、エリユが頷く。

「ちよつとお。冗談キツイわよ。今どき吸血鬼とかホラー映画じゃあるまいし、しかもそんなこんなところにホイホイいるわけないで

「しよ？」

「うーん、でも居たら面白いとおもふなあ。」

薫のツッコミにのんびりと優香が答える。

案の定、二人はエリユが吸血鬼であることを信じる気はなさそうだ。

特に薫は真っ向から否定している。無理もない。ひなたも初めは疑っていたのだから。

「…エリユ、お腹空いてるよね。」

「うん。空いてる。」

ひなたの問いに即答するエリユ。薫に見つかる原因になったのはエリユの腹の音だったのだから当然腹は減っている。

「…分かった。」

そう言うと、ひなたは台所から包丁を持ち出した。

それを見て何をするのか分かったエリユがすかさず止めに入る

「ひなた！そんなことしないでいいってば！」

「ちよつとお！何してるのひなたっ！！」

「ひなたちゃん！？」

「こつでもしないと二人とも信じないもん」

「や、信じさせなくていいから！」

「いつも飲んでるくせに。」

「包丁でつける傷とはまた別っ！俺そんなに深く傷つけないし！！」

包丁を握るひなたの腕をしっかりと握り、エリユはひなたを説得する。

むうう、と見上げてくる彼女を心底可愛いと思いつつ。

と、ひなたはある考えに至った。

右手が動かせないなら左手を動かせばいいのだ。

固定された包丁に左腕を思い切り持って行く。

さすがに予想外の行動だったのかエリユもすぐには反応できなかつ

た。

「ひなた！」

「…はい。」

エリユは眉をしかめ、ため息をついた後差し出されたひなたの腕の傷口を口に含んだ。

少しだけ舐めた後、すぐにエリユは口を離した。

「え…もういいの？」

「あとでいい。」

その声は少し不機嫌そうだった。

それは表情にも表れていて明らかにひなたの行動に不満があったことを示していた。

「そこまでして俺が吸血鬼だって証明しなくてもいいだろ？」

「だっ…」

「ひなた…」

困ったような、諭すような表情で見つめられ、ひなたは反論できなくなってしまうた。

彼に何をしたわけでもない。それでも何とも言えない罪悪感を感じる。

「…ごめんなさい。」

「今度からこんなことしなくてもいいからね？」

「…うん…」

一通りお説教した後、エリユはティッシュでひなたの傷口があった場所を丁寧に拭いていく。

最初の頃と同じように傷は綺麗に癒えていた。

その光景を薫と優香は信じられない。と言いたげな表情で見つめていた。

「確かに…ひなた…腕切ったわよね…」

「うん。」

「包丁に血がついてるし切ってるよね」

「う、うん…」

「てことは…本当に…？」

「そう…だよ…？」

エリユをちらりと見つつ、答える。

「アンタ馬鹿じゃないの!？」

その薫の叫びに優香も心配そうな表情でひなたを見つめる。

薫はエリユを指さしながら続ける

「男よ男っ!しかも相手は人間とかじゃないのよ!？」

「う、うん…でも…」

「でも何よ!」

「放っておけなかったんだもん…」

「あのねえ、犬とか猫とかと違うのよ!？何されるか分からないのよ!？」

「ひなたちゃん…捨て犬とか捨て猫とかよく拾ってたもんね…」

エリユは薫の気持ちがあがっていた。

ひなたの事を心から心配している。普通に考えて見ず知らずの自分を部屋に保護する事が不自然なのだ。

だからどんな言われ方をしようと、決して口をはさむことはなかった。

きつと、これが人間の…この世界の“人間の”、自分たち吸血鬼への普通で素直な反応なのだ。

ひなたの行動が、優し過ぎるだけなのだ。

そう、自分に言い聞かせていても、やはり少し悲しくて、さびしい。

眼前では、まだ薫がひなたに説教をしている最中だ。

目を閉じて、もう一度自分に言い聞かせてやる。

それが、この世界の普通なのだ。と

3人分のケーキを平らげー（エリユは味覚しかないのでひなたに一口だけ貰った）薫と優香は帰ることにした

帰ることになっても、薫のエリユへの態度が変わることはなかった。

「ひなたに何かしたらただじゃおかないから！」

「薫…。」

その言葉にも、エリユは素直に頷いた。

反論するでもなく、怒るでもなく。ただ、静かに。

そんなエリユを申し訳なさそうに一瞥した後、ひなたは彼女たちを送るために家を出た。

「薫ちゃん…やっぱりあの人気悪くしたんじゃない…？」

「気分悪いのはこっちよ。まったく。ひなたも何であんなの拾ってきたわけ!？」

「あ、あのね？エリユも悪いひと…吸血鬼じゃないんだよ？」

「なによ。」

「うん…。エリユって血の匂いに敏感でね？」

その日、ひなたはもくもくとおやつを食べていた。

一応味覚があるのでエリユにも一口おすそ分け。

と、少し食べ進んだ時だった。

「…っ」

「え、どうしたんだ？」

「口の中、噛んだ…。」

エリユは首を傾げて眉を寄せる。

そうして、ひなたの口の中も確認せずに言う。

「あー、本当だ、血出てるな。」

「え!?!なんで分かるの!?!」

「血のにおいがする。」

その言葉にひなたはぎくりとした。

血が出てる。血は吸血鬼の食べ物で、人間に言いかえれば食べ物の匂いがしていることになる。



しかし、血が出ている場所は口の中。

そこから血を飲む方法は…

そつとエリユを確認すると、意外なことに彼は何も反応を示していない。

「の、飲んだりしないの…？」

その言葉にエリユはひなたの唇にちよんちよん、と人差し指で触れる。

驚いたひなたが彼を見るとエリユはいたって普通に。

「唇は人間にとつては大事なとこなんだろ？」

だから、がまんする。と笑った。

その笑顔に、その行動に、ひなたは顔を赤くして俯く以外に何もできなかつた。

「…ね？そ、そんなに悪いひとじゃないでしょ…？」

「あのひとつてそこまで考えてくれるんだね」

のほほんとした笑顔で優香が答える。

一方、薫の方はうん、とうなりつつ。考え込んでいる。

「解せぬ。」

「…私もね、信じられないくらいいい人だとは思ってるの。」

「うん、たぶん普通の男の人より優しい人みたいだね」

「…吸血鬼っていう一点を除けばもしかしたら理想的な男かもね」

とうとう薫も折れた。1週間もひなたと一つ屋根の下で暮らしていて何もしない、しかも吸血鬼という身でありながらひなたが許可するまで血を飲むことは決してしない。

先ほども、ひなたが包丁で自身の腕を切ろうとするのを止めていた気もする。

その他諸々考えてみても普通の人間の男よりも優しい。

「ひなた。」

「うん？」

「あいつに謝つといて。後で、私も謝るから。」

その言葉にひなたはくすつと笑い、頷いた。

吸血鬼と外食します。(前書き)

恐らく。これが彼の性格なのだろう。

## 吸血鬼と外食します。

薫は心底悔しそうな顔をして玄関で仁王立ちしていた。

その目はもちろんエリユに向けられている。

ひなたは苦笑し、優香は相変わらず微笑ましそうに見つめ、エリユは不思議そうに首を傾げる。

かれこれ数分はこの状態だ。

「…こ…っ」

「こ…っ？」

「この間は…悪かったわよ…っ。」

「この間？」

薫はこの間、つまりエリユとの初対面の日の事を言っているのだ。

ちなみにこの言葉を言うためだけに家で予行練習をしていたのは内緒だ。

その言葉にエリユは少し考えて切り返す。

「え？俺何かされたっけ。」

うーん…と考えるエリユに薫、キレる寸前。

すかさずひなたが補足を入れる。

「あー、ほら。この間さ、薫、結構エリユの事悪く言っちゃってたでしょ？だから…」

「んー、しょうがないんじゃないかねえの？」

あつさりと答えるエリユに薫もさすがに困惑した。

今度は優香が首を傾げている。

「しょうがないの？」

「うん。だってさ、それってひなたの為に言ってたんだよな。」

「そ、そうだけど…。」

「じゃ、いいや。」

にっ。と笑ってエリユは答える。

自分の事をあれだけ悪く言われていたのにまったく彼女を責めるこ

ともなく。

ただ、ひなたの事だけを考えて。

「いいやって…あんたプライドとかそういうの無いわけ…?」

「あるよ?でもさ、もし俺が…えーっと…薫?の立場だったらたぶん同じように怒ると思う」

「それは…そうだけどさ…。」

「それに、それがこの世界の“人間”の俺たちに対するイメージ。なんだろ?」

うーん。と困ったように笑いながらエリユは説明する。

悲観するでもなく、不快な表情をするでもなく。さらりと言っている。

ちなみに、ひなた達の世界の吸血鬼像。

ある日、その一例が見てみたいと言っているので吸血鬼物でホラー映画のDVDを借りて見せてみると彼は大笑していた。

というのはまた別の話。

「……ひなた…。」

「え?」

「こいついつもこんな感じなの…?」

「う、うん。そうだけど」

「薫ちゃん、ひとを指さしちゃだめだよ?」

ふふふ、と微笑ましく笑いながら優香がツツコミを入れる。

納得がいかない様子で薫はエリユを見ていた。

「買い物?」

「そ。夏服買に行こうと思ってね、ひなたも誘おうと思ったんだけど……」

そこで薫はちらりとエリユの方を見る。

3人が会話する様子を傍観しようとしていた彼は首を傾げる。

「俺のことは気にしなくていいぜ?留守番してるから。」

「え…。」

その言葉に困ったのはひなただ。

確かに薫と優香で女3人買い物をするのも悪くはないだろう。

でもその間、エリユは一人、この部屋でひなたの帰りをじっと待つことになる。

そこまで考えたところでひなたも彼の方を振り向く

いいよ？と言うように笑う彼。

「ね、ねえ…4人で…いかない…？」

「え？」

「いいの？」

「そうだね～。みんなで行ったほうがたのしそうだし。」

ひなたの言葉に三者三様のリアクションを見せる。

とりあえず、この場合3人で悩んだ場合の決定権は

「薫…だめかな…」

「なによもう…なっさけない顔して頼み込まないでよ…」

ひなたに言われ、薫は肩を落とす。

相変わらず優香はにこにここと微笑んでいて、エリユは首を傾げて。

とりあえず。結論は出たようだった。

とあるシヨップینگモールの一角。

「別に全部持たなくてもいいのに…」

エリユはひなたの買った荷物を全部持つてくれていた。

とりあえずここまで二軒。

さして量は無いがさすがに全部持つてもらうと少し申し訳ない気分になる。

「いや？重くないし別にいいよ。それに俺の分も買ってあるんだし。」

「でも…」

そうひなたが言うとエリユは空いている方の手でひなたの頭を撫でる。

大丈夫。と言いたいのだろう。  
と、エリユは薫の方にも手を差し出す。

「ん。」

「は？」

「荷物ちようだい？」

「え？」

「だから荷物。重そうだし。」

「ちょ、ちよつと！これくらい一人で持てるわよ！」

失礼な！と言わんばかりに薫はよいしょ。と荷物を持ち上げる。

当初の目的だっただけに薫はひなたよりも服を買っていて若干重い。

そして比較的華奢なひなたよりもさらに一回り小さくてこれまた華奢なのだ。

一人で荷物を持っている姿を見て大変そうだなあ。と感じたのだろう。

ちなみに優香はまだ何も買っていないので除外。

恐らく、彼女が何かを買っていればその分も持ってやっているはずだ。

“自分ができるとして何かひとの役に立てる事があれば”という信条に従ってのことだ。

やがてエリユは薫が持っている荷物を下から抱えた。

「えっ、ちよつとっ…！」

「あー。手、かたが付いてるな。」

「素直に持ってもらったらよかったのに」

「薫…意地っ張りだもんね…」

「う、うるさいなあもっつ！」

口々に感想を言うひなたと優香に顔を赤くして反論する薫。

それを横目に眺めつつ、よいしょ。と薫の分の荷物を抱えなおした。

何軒か回り、それなりに荷物も増えたところで昼食にすることにした。

と、薫があることに気が付いた。

「…あ。」

「へ？なに？」

「え、何か買い忘れたの？」

「違うわよ。」

ひなたも優香もエリユも首を傾げる。何だろう。

少し考えたところでひなたも気が付き、あ。と声を上げた。

昼食。でも“彼の昼食”と言えば。

「ど、どうしよう…。」

「人気のないところがいいわよね」

「でもそうそうないよ？こういうところ。」

「さすがにトイレはダメだし…」

ん！。と考え込む3人に首を傾げるエリユ。

彼女たちが何を考え込んでいるのかあまりわかっていない。

「ちよつと！あんたも考えなさいよ！自分の食事の事よ！？」

「ん？」

指摘され、ああ。と納得する。

エリユの食事というのはもちろん吸血行為に他ならない。

彼の場合、我慢していると腹が雄弁に物語ってくれるので先に済ませておいた方が無難だ。

「ひ…非常階段…とか…」

「でも通るときは通るわよ？子供とか。」

「うええ…どうしよう…」

「1階の階段下のスペースなら見つからないよ？」

「それいいかも！！」

とりあえず食事場所決定。

荷物をどうしようか。と迷ったエリユに薫が声をかける



「ああもう！見ててあげるからさっさと行ってきなさいよ！」

「ありがとう」

にっ、とエリユが笑うと薫は顔を赤くして目をそらした。

それを不思議そうな顔で見つつ、エリユはひなたについて行った。

非常階段の階段下。少し薄暗く、埃っぽい。

「なるべく早く済ませないとな。」

「う、うん。そう…だね。」

今からするのは彼にとっては単なる食事であるはずなのにひなたは何故か妙な羞恥を感じる。

恐らくそれは血を飲んでいる時の彼の雰囲気がそうさせるのだろう。

エリユは彼女の前に跪き、ひなたの着ている薄い長袖をするりと捲る。

そうしてその白い肌にゆっくりと牙を立てた。

二人で協議を重ねた結果。一番飲みやすく、かつ、ひなたがギリギリ恥ずかしくない場所がそこだった。

どこであれ、恥ずかしい事には変わりないのだが。

ちなみに、オーソドックスに首筋から飲もうとしたところ、

ひなたから突き飛ばされて往復ビンタされたのでそこは避けている。

しかも相当怒らせてしまったらしく、その日は食事をさせてもらえなかった。

そんなわけで、腕から飲むことにしたのだ。

「…ごちそうさま。」

「う、うん。」

「うまかったよ。ありがとう」

にっこり。と笑うエリユ。いつもの笑顔、先ほど薫に見せた笑みではなく、優しい笑顔。

ひなたが顔を赤くして俯いていると、いつものようにハンカチで優しく口を付けた場所をぬぐっていく。  
これが最近の日常なのだが、どうしても慣れるという事が無い。  
彼に吸血行為をされるたびに、必ず羞恥を感じてしまう。  
ただ単に腕を晒しているだけなのだが。  
彼に、すべてを見られているようで。

「た、ただいまー…」

「遅い！」

「おいしかった？」

「うん」

「そっかぁ」

「優香、ソレ普通に聞くことじゃないでしょ!?!」

まるで何か料理を食べてきたのかとでも聞くような優香に素直に答えるエリユ。

はじめは驚いていたものの、もうすっかり慣れてしまったのか彼の行為にあまり違和感を感じていないようだ。

よいしょ。と再び全員分の荷物を持ち直すエリユ。

これがひなたの分で…と間違えないように確認しなおす。

エリユの腹が膨れたところでようやく全員カフェに入ることにした。

薫、優香、ひなたの順で注文を決めていく。

しかし、人間の食べ物にあまり馴染みのないエリユはどうすればいいのかよく分からない。

困ってひなたに相談したところ。

「コーヒーとかどうかなあ。」

血って苦いし。と彼にだけ聞こえる声で言う。

エリユは少しだけ悩んで、頷いた。

一応味覚だけはあるので頼むだけ頼む。

その方が違和感がないと感じたからだ。

カフェの風景を見ながら、エリユは故郷を思い出していた。そう言えば、故郷にもこんな場所があるよな。と

ぼんやりとテーブルを見つめ、考える

懐かしい思い出。けれどもどこか悲しい思い出。

もう、顔も思い出せない。幼い頃の思い出。

優しく微笑む口元、名前を呼んでくれる声…

「…リユ…」

冷たくなった、その躰…

「エリユ！」

「え？」

薫に怒られてエリユは現実に戻された。

目の前にはいつの間に来ていたのか湯気を立てたコーヒー。

ひなたも優香も、心配そうに彼を見つめている

「…エリユ、大丈夫？まだ食べたくなかった？」

「や、そういうんじゃないよ」

心配そうに問うひなたに笑顔で返す。

本当に笑えているのか分からないが、彼女には心配をさせたくないかった。

不安になったのか、ひなたはエリユの額に手を当てた

柔らかかなそれでいてあたたかい手のぬくもりが伝わってくる。

「本当に大丈夫だよ。言つたる？俺たちは頑丈だって」

彼女の髪を撫で、エリユは程よく冷めたコーヒーを口に含んだ。

熱くて、苦い味が、口の中に広がる。

それは、今の彼の心のようにだった。

吸血鬼と内職します。(前書き)

おかしな関係だとは、自分たちでもわかってる。

## 吸血鬼と内職します。

「ひなたー」

「ん〜？」

座卓に頬をくつつけたまま、エリユが尋ねる。

ちよこちよここと作業をしているひなたは彼の方を向かずに答える。

とりあえず、これも日常風景。

「気になってたんだけど。それ、なに？」

「これ？」

「そう。」

ひなたは少し考えてみる。はて、どう説明するべきか。

おもちゃ屋とかスーパーなんか置いてある主に子供たちがガチャガチャやるアレ。

と説明したとして。何？と聞いてくるくらいだから彼はこういうものに接する機会はなさそうだ。

ひなたは作業の手を休めて彼の目の前に作業の成果をことん。と置いてやる。

カプセルにおもちゃが入っている。

「開けてもいい？」

「だーめ。今詰めたばかりなんだから。」

「何してんの？」

「お仕事だよ？」

カプセルにおもちゃを詰めるお仕事。

作業をしているひなたと目の前のカプセルを交互に見つつ。

部屋の中には段ボール箱がいくつか。

最初は何か食べ物や雑貨とかそういうものが入っているのかとも思ったが

どうやら全部これに使われる道具のようだ。

お仕事。という事は働いている。働かないと食っていけないよなあ。と思いつつ。

はて、自分の生活費等々はどこから出ているだろうか。と考える。さすがにひなたに頼りっぱなしではいけないだろう。

そう思いながらひなたの置いたカプセルをちよいちよいとつつく。

しばらく考えた結果。

「ひなたー。」

「ん〜？」

「これ俺にもできるー？」

「できない事もないと思うけど、どうしたの？」

「やってみてもいい？」

とりあえずひなたの家に置いてもらっている以上、何か彼女の役に立とう。という結論に至る。

見る限りは単純作業。そう難しくなければ、自分も手伝ったりすれば少しは足しになるかもしれない。

あくまでも少しは。だ

「いいけど、あんまり面白くないと思うよ？」

苦笑しつつひなたはカプセル一個分の道具を彼に渡してみる。

エリユはよいしょ。と体を起こし、それをじっくり眺める。

彼の隣について一通りのレクチャーをするひなた。それをふむふむと聞きながら手元を動かしてみる。

とりあえず、一個完成。

「へー。」

完成したものをじーっと見てみる。

中に入っている紙のようなものを綺麗に折るのは気を使うが、それ以外は自分にもできそうだ。

再び自分の作業に戻ったひなたの横からこっそりと二つ目の道具を

拝借。

先ほどひなたが用意してくれた道具と一緒に数を確認しつつ。自力で二個目完成。きちんと一個目と同じにできている事も確認。なんとなくだが自分でもできそうな気がしてきた。

意外と単純作業に向いているのかもしれない。とりあえず、三個目拝借。

慣れているひなたに比べれば速度は遅いものの一個一個確実に間違えないようにこなす。

しかし、中に入っている紙のようなもの。こいつがくせものだ。

折るのも面倒なうえ、取る時もつつかりすれば2枚取りそうになる。

「あれ？」

いつの間にかわきに置いてあった道具が消えていることに気が付いたひなた。

きよろきよろとあたりを探してみると犯人はすぐ隣に居た。

エリュの隣には小さく作業済みのカプセルの山が出来ている。

山を築いた本人はせっせと単純作業をこなしていた。

と、視線に気が付いたのか顔をあげる。

「ん？どうしたのひなた。」

「楽しい？」

「そこそこ楽しいよ。紙折るの大変だけど。」

にっ。と笑うエリュにひなたも苦笑する。

内職をやる…吸血鬼…。

面白いにも程がある。

吸血行為をしている時以外はこうして普通の男性、むしろ男の子として家にいる。

一度年齢を尋ねてみたことがあったがどうやら彼はひなたの二つ下らしい。

こちらの世界で言えば高校2年生だ。

そこを考慮してもまだ彼の普段の行動は普通の高校2年生より若干幼い気もする。

もしかするとひなたが年上であるからそう感じるのかもしれないのだが。

だが、“その時”になるとどうした事かひなたよりも大人びて見えるのだ。

解せぬ。

納得のいかない様子でエリユを見てみると、彼と目が合う。

「なに？」

「な、何でもない。」

ふい。と目をそらす。そんなひなたを今度はエリユが覗き込む。

「なんか気になるんだけど」

「え、ほ、本当なんでもないからっ…」

顔が真っ赤になっているのを隠そうとわざと髪を下ろす。

彼の表情も見えなくなったが少なくとも自分の表情と顔色は彼から見えないだろう。

しばらくそうして落ち着いたところでふと顔を上げる。  
と。

「…っ!？」

エリユが自分を覗き込んでいる。しかも超至近距離。

驚いたひなたは後ずさるうとしてそのまま後ろに倒れこむ。

「わっ、ひなた大丈夫!？」

エリユが支えていなければそのまま床に頭を打ち付けていたところだろう。

慌てていたのかエリユは床に手を付き、ちょうどひなたに覆いかぶさるような形になる。

ひなたはようやく落ち着いたというのに今度は耳まで真っ赤になってしまった。



「え、あ…っ」

「えっ！？どこか打った!？」

ひなたは動揺し過ぎて言いたいことが言葉にならない。

今度はひなたの顔が真っ赤になっているのがはつきりと見て取れたからか、エリユは首を傾げる。

ちよつと今の状況整理。

「あっ！ごめんひなた。」

ようやく気が付いたのかエリユはひなたの体を起こして身を離す。

彼が身を離れた後も、ひなたは俯いて動けなかった。

そんなひなたの姿をエリユははらはらしながら見つめる

まずい…怒らせたかな…。

一方ひなたの方は先ほどの動揺がまだ収まらずに目をつぶって考え込む。

彼の目を見ることも、彼の姿を見ることさえ今は恥ずかしい。

本当に付き合っていないのか疑問になるほどの日常。

やっぱりおかしいな関係。

## 吸血鬼は憂鬱です。

自分にとっては、あたたかい場所になった。でも、彼にとってはどうなのだろう？

朝、ちよこちよこと弁当を作るひなた。

昼ごはんは大学の売店か食堂でも済ませられるのだが、微妙に高いので手作り弁当。

花嫁修業もできて一石二鳥ではないか。

そう思いつつ器用にフライパンを返す。

「ん……」

その声にひなたはちらりと座卓の方を向く。

寝起きのエリユが眠い目をこすってこちらを向いているのが分かった。

「おはよう」

苦笑しながらひなたは彼に呼びかける。

相変わらず寝ぼけているのか彼は起き上がって一人でうん、うん……と頷いている。

彼の寝床は座卓の前にある座椅子だ。

これも一応二人で協議して決まったことで、今では普通にそこを寝床にしている。

ひなたの使っているのはふかふかの座椅子なので結構寝心地はいいらしい。

最初、彼は玄関で寝る。と言っていたのだが、さすがに春先はまだ寒い。

吸血鬼の温度の感じ方がどうなのかは分からないが、彼に聞いてみるにそう人間と変わらないという。

それならやはり寒いだろう。という事で比較的あたたかい座卓の方に来てもらった。

彼にしてみればやはり女性であるひなたの近くで寝るのはさすがに気が引けたのだろう。

座卓まできてはいるものの、やはりひなたのベッドからは比較的遠い位置に眠っている。

くすくすと笑いながらひなたは料理を再開した。

しばらくそうして料理を作っては弁当箱に詰め、作っては詰め。を繰り返したところで

ようやく彼が目を覚ましてひなたの所へやってきた。

「…おはよう。」

先ほどよりははつきりとした口調にはなつたがまだ眠いらしい。

そのまま彼は洗面所へ行き、顔を洗って再びひなたの元に戻ってきた。

今度ははつきり目が覚めたようだ。

「まだ寝ててよかったのに。ご飯まだだよ？」

「人間の食べ物の匂いがしたから。」

「でも食べないでしょ？」

ひなたのその言葉に頷きかけて首を傾げる。

それから少しだけ考えて彼女が作った料理を見て首を振る。

「一口ちょうだい。」

力の抜けたような笑みでひなたに要求。何度も言つが彼には一応味覚はある。

しょうがないな、とひなたは料理を詰めていた箸でエリュの口に比較的苦そうなメニューを放り込んでやる

「おいしい。」

満足そうに笑う彼に、ひなたもつられて笑ってしまふ。

自分の作ったものをこうしておいしいと言って褒めてもらえると誰でもうれしいものだ。

ここ数日で分かったことだが彼はどうも血と似たような苦い味を好んでいるらしい。

ちなみに人間の食べ物で一番好きな味はレバーや心臓といった内臓系の料理だそうだ。

確かに彼の主食を考えれば納得がいく。若干空腹も紛れるという事も分かった。

本当は生で食べたい、と言っていたのだが新鮮なものならまだしもスーパーで買ったものなので、衛生上の理由から火を通して出している。

ちなみに一度、薫から牛肉などから出るドリップという汁ではだめなのかと問われていたが、残念ながらだめ。と申し訳なさそうに答えていた。

もう少し濃いなら飲み物になるけど。とも答えていたような気がする。

あとから分かったことだがこの汁も結構衛生上よろしくない。

「……ごちそうさま。」

「う、うん。」

もうかれこれ数十回は繰り返されているそのやり取り。

やはり何度やっても慣れてくれない。

なぜ食事をするときだけこんなに妖艶な雰囲気になるのだろう。

ひなたの前に跪き、優しく手を取り、ゆっくりと牙を立てて。

伏し目がちに、こくりこくりとゆっくり飲み干していく。

飲み終わるところで咳くようにごちそうさま。と言うのだ。

その光景は何度見ても恥ずかしい。

うーん。と考えるひなたをエリユは不思議そうに眺めながらいつものように自分が口を付けた場所を優しく拭う。

彼の七不思議だ。

彼の“食事”が終わるとひなたは学校へ行く用意をし始めた。今日は朝から夕方までみっちり講義があるため、エリュは昼抜きになっってしまう。

それを少し気にしつつ教科書と弁当をカバンに詰める。

彼の方を見ると、座椅子にあぐらをかいてひなたの様子を見ている。

「え？なに？」

「いや？重そうだなと思ってさ」

どうやらカバンに詰めている教科書類を見てそう思ったようだ。

でもさすがに俺が大学まで持って行くのもなあ…と困った顔をする。

いくらなんでも過保護だ。

ひなたも困ったように笑いながら教科書を入れる。

そうするうちにひなたが家を出る時間になった。

「行ってきまーす」

「ん、行ってらっしゃい。気をつけてね。」

「うん。」

これも日常になってきた。

行ってきます。そう言つと返事が返ってくる。

一見当たり前の光景、けどつい先日までは一人で暮らしていたのだ。

誰もいない部屋。それが当たり前だった。

でも、彼が来てからはそうやって見送ってくれる。

優しい笑顔で、見送ってくれる。

家を出て、ひなたは思い切り息を吐いた。

その顔は心なしが赤い。

彼が行う“食事”、少年のように無邪気な笑み、時々見せる優しい笑み。

背に触れた手のぬくもり。

どうしても慣れなくて、そのたびにこうして鼓動が早くなる。

「…ち、がうよね…。」

一瞬よぎった可能性を打ち消して、ひなたは学校へと向かった。

一方、ひなたを見送ったエリユもまた、ため息をついていた。

彼女が閉めたドアに、こん。と頭をぶつける。

寂しい。彼女は学校へ行ったただけだというのに、とてつもなく寂しい。

さっき出て行ったばかりなのにもう既に早く帰ってきてほしいと思っ  
つてしまうほどだ。

なぜこんなことを思うのか、分からなかった。

自分はこんなに寂しがり屋だっただろうか、そう考えてみるものの  
別にそうでもない。

座卓に戻り、彼女の居た台所を眺める。

ぽたぽたと水の滴る音がしていた。立ち上がり、少しだけ、蛇口を  
きつく締めてやる。

あまりきつく締めすぎると彼女が使うときに困ってしまう。

彼女と居たい、彼女の笑顔が見たい。

それもまた、彼の日常。

自分より小さく、華奢な彼女。怒ったり笑ったり、普通の人間とし  
て接してくれる

自分には姉が居ないから、彼女は自分よりも年上だから、彼女に甘  
えたいのかもしれない。

はじめは、そう思っていた。

彼女と日常を過ごすうち、それは違う。と思い始めてしまった。

自分に“食事”をさせてくれた後に見せる彼女の表情、困った顔、  
少しだけ怒った顔、優しい笑み。

そのすべてを愛おしく感じるようになってしまった。

そのたびに、胸が締め付けられる。

「何考えてんだよ…俺は、吸血鬼だぞ…。」

自分は吸血鬼でひなたは人間。目を閉じて、そう、自分に言い聞かせる。

そうしなければきっと自分は気持ちを抑えられなくなる。

この気持ちを伝えてしまえば、きっとすべてが壊れてしまう。

今は何よりも、それが一番恐ろしかった。

彼女に拒絶されることが、今の関係まで壊れてしまうことが。

首を振り、思考を中断させる。

こういう時は単純作業が一番だ。

そう考えることにして、ひよい。と彼女の仕事道具を引っ張り出し、ちょこちょこ作業を始めた。

彼女のいる部屋は暖かくて、でも彼女の居ない部屋は驚くほど冷たく感じた。

吸血鬼がおつかいです。(前書き)

もう少し、もう少し。この日常を。

そうやって毎日思い続けても、いいですか？



吸血鬼がおつかいです。

「ただいまー。」

「おかえり、ひなたーっ。」

ひなたがドアを開けるとエリユは玄関まで迎えに来てくれた。そうしてひなたの持っていたカバンを持つ。

「いいよ、自分で持つから」

そう言ってもなかなか渡してくれない。

ひなたはいつも自分のベッドのわきにカバンを置いている。

それを知っているエリユはそこまで持つて行つてくれるのだ。過保護だなあ。

そう思いつつ苦笑いをする。

座卓の上と床の一角所に固められた本日の内職の成果。

ひなたは律儀な行動だなと思つているのだが、

エリユにしてみれば何もしていないと色々考えてしまうからやっっていることだ

一息ついたところでひなたは夕飯を作ろうと冷蔵庫を開ける。今日の夕飯はオムライス。

が、あることに気づき声を上げた。

「あ。」

「え？どうしたの？」

「卵切らしてたんだっただ。」

ふむ。とエリユは少し考える。

今から買に行くにしても外は真つ暗。さすがにひなたが出歩くのは危ない。

「んー…俺が買ってこようか？」

「え？」

「そこのスーパーだろ？」

「う、うん…」

スーパーの場所と売り場まで覚えてしまっているので少し歩いて買ってくるだけだ。

首を傾げるエリユにひなたも少しだけ考えてバッグを持ってきた。

「じゃ、じゃあお願いできる…?」

「ん。卵だけでいいの?」

ひなたから卵代を貰いつつ確認を取る。

外出のついでにいるものもあれば。という事らしい。

「うん、足りなかったら今度買いに行く…」

「わかった。いつてきまーす」

ひなたに笑みを見せた後、エリユはドアを開け、おつかいに出かけた。

ぱたん。と閉まったドアを見て、ひなたはため息をついた。

「はうううう…」

顔を赤くしてその場に座り込む。

気が付いてはいけない事に気が付いてしまった。

一度は否定したその感情が時を重ねることに増していく。

彼への感情。

見上げた彼の顔が、背中に感じたためくもりと力強さをどうしても思い出してしまう。

しばらく座り込んで若干寒くなつたのか座卓まで戻る。

先ほどまで彼が座っていて、いつも寢床にしている座椅子。

それに座り、体を預けてみる。ふかふか。

微かにラベンダーの香りが残っている。彼と居るとふとした時に漂う香り。

「彼女とか…居るのかな…」

そういえばそのあたりは全く聞いた事が無かった。

薫や優香への態度を見るに、彼は誰にでも優しい性格をしている。

もしかしたら彼の元いた場所に、彼を想う人…吸血鬼を残してきて

いるのかもしれない

「いつか…帰っちゃうんだよね…」

その日の事を想い、憂鬱な気分になってしまう。

そんなことは彼を住まわせることになった時から分かっていたはずだ  
それが前提で彼を住まわせたのだ

まさかその前提を嘆くとは夢にも思っていなかった

“その時”にどんな言葉をかければいいのか。

この想いを、伝えてもいいのか。

そんなことを考えているうちにひなたはそのまま眠ってしまった。

一方。おつかいに出かけたエリユ。

「たまごたまごーっと。」

卵売場はエリユが入った入口からだとし離れた場所にある。

その道がすら。どうしても通らなければいけないのが肉売り場と魚  
売り場だ

普通であれば試食販売の匂いにつられてしまいそうなものだが、彼  
の場合はまた別。

うう。まだ飯食ってねえからなあ…。

肉や魚の血の匂いに加えて昼間から“食事”をしていない為ついつ  
いそちらに気を取られそうになる。

というか腹の虫が猛烈にアピールしてくる。

我慢我慢っ、家に帰ってひなたがご飯食べるまで我慢っ。

腹は相変わらずくうくうと音を立てるものの、引き受けた事をする  
のが最優先。

「これ…だよな。」

実はエリユ、日本語が読めない。

一度、ひなたが家に住むうえでの約束事を書いてエリユに見せたこ  
とがあつたが、彼は全く読めなかった。

逆に、彼がひなたに自分の名前を正確に書いて見せたところ、彼女  
もまったく読めなかった。

どうやらエリユが書く言語は日本語とは異なるようだ。  
しかも、彼は吸血鬼。人間の食べ物に関してあまり詳しくない。  
というわけで、卵に関してもひなたが使っているのはたぶんこうい  
うやつ。という認識だ。  
とりあえずいつも買っている卵の数の中で下についている紙の数字  
が小さいものを選んでレジに行く。  
肉と魚の誘惑を振り切りなんとか卵を買うことに成功。  
17歳にしてはじめてのおつかいだ。

「ただい…まー…」  
家に戻り、エリユがリビングのドアを開けるとそこには座椅子にも  
たれて眠るひなたの姿があった  
一応座椅子がふかふかしてはいるがさすがに上に何かかけていない  
と風邪をひいてしまう。

そう思ったエリユは自分の着ていた上着をそっとかけてやった。  
気持ちよさそうに眠っているその横顔を見て、じわりと胸が温まる。  
髪を撫でたい衝動に駆られて腕を伸ばしたところでエリユはふと我  
に返った。

「うわ、何してんだ俺っ…。」  
ひなたを起こさないように彼女のベッドの近くに移動する。  
くうくう鳴りっぱなしの腹を押さえつつ座り込み、ひなたの方を向  
く。

「腹…へったなあ…」  
情けなく呟く。

自分は空腹、ひなたは無防備な状態で眠っている。  
けれどエリユは決してそんなひなたを襲ってまで血を飲もうとは思  
わなかった

疲れてんだろうな…。  
そんなことを思いながら、彼女が起きるのを待った。

「ん…」

ひなたが目を覚ますと何か手に触れるものがあつた。

だんだんはつきりしてきた意識でそれを確認するとそれはエリユが出がけに羽織っていた上着だった

「起きた？」

「え？」

エリユの声が後ろから聞こえ、ひなたは驚いて振り返る

どうも彼は眠っているひなたの傍には近寄れないらしく、距離を取ってひなたのベッドのとなりに座り込んでいた。

しかもなんだか間の抜けたような情けない顔をしている。

くううううう。

「ご、ごめん！ご飯まだだったよね！」

「あ、いや、別に俺は後でもいいよ…。」

後でもいい。と言われてもくうくう腹を鳴らしている吸血鬼の隣でご飯は食べづらい。

いつものように腕を洗って彼に“食事”をさせる。

彼の腹が満たされたところで自分の食事の支度に入った。

オムレツ完成。エリユのリクエストで彼の分にはケチャップで絵が描いてある

彼のはちびっ子サイズなので凝った絵は描けないものなかなか可愛い絵だ。

「いただきます。」

本日4度目。

味だけの食事。もちろん腹はふくれないが彼女の作ったご飯はおいしい味がする。

彼女とこうして過ごす時間が一日の中で何よりも至福の時だ。

それはひなたにとっても同じだった

自分の作ったご飯を食べておいしい。と笑ってくれる。

お世辞なのかもしれないがその笑顔が嬉しかった。

同じ時を二人で共有する。そんななんでもない時間が、嬉しい。

それは自分だけかもしれない。と、二人揃って思っていた。  
相手も同じ気持ちだなんて、気づかない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3017z/>

---

吸血鬼をひろいました。

2011年12月16日01時53分発行